

< 小学校国語科資料 >

国語科 学習指導案

長期研修 研修員 大高 幸子

目指す言語能力

目的や意図に応じて文章の内容と要旨を的確に押さえ、その内容や要旨、筆者の意図に対する自分の考えを明らかにしながら読む能力【C読むこと(イ)(エ)】

題材名

情報を正確にとらえよう

考察

1 児童の実態(省略)

2 指導内容と教材とのかかわり

(1) 教材名 森を育てる炭作り(教育出版・小学校5年)

(2) 教材観

本教材は、環境保護の代表的な対象の一つである森を保全しながら行われてきた、日本の炭作りの仕組みと、森を減少させてしまった無計画な焼畑から炭作りに農業を転換してきた、トホ＝イリル村の事例を根拠に、「人間と自然との共存」の必要性を訴える、説明的な文章である。

日本の炭作りは、木を切る作業も、枝打ち、下草刈りなどの作業とともに、木々や木々の芽に当たる光の具合を調節するように行い、半永久的に継続して行うことができる。それに対し、トホ＝イリル村の焼畑は、無計画に行われ、森林の破壊をもたらした。トホ＝イリル村の人々は、自分たちの過ちを正し、森の環境を守りながら続けられる農業として、炭作りを導入し成功させた。筆者は、日本の炭作りの仕組みと、トホ＝イリル村が焼畑から炭作りに農業を転換する経過を説明することで、人間が自然からめぐみを受けながら生きていけるかどうかは、人間の適切な自然への働きかけにかかっていることを主張し、その意図を「森を育てる炭作り」という題名に反映させている。児童は、日本の炭作りの仕組みの中に、炭作りに携わる人々の森と共に生きていくための知恵と工夫を、トホ＝イリル村の事例の中に、人々の炭作りの導入にかかわる植林や焼きがまの開発などの地道な努力を、賞賛と共感の気持ちをもって読み取るであろう。

以上のような本教材の内容的な特性を踏まえ、導入時に、児童が学校全体で取り組んできている環境活動などを振り返らせ、森や炭作りのイメージを広げたり題名に着目させたりすることで、筆者の主張につながる子供たちなりの視点を、初読段階からもたせることができる教材である。また、その視点は、学習過程全体を通して、児童が自分たちの生活に関連付けて主体的に教材文とかかわり、文章に書かれている事実関係や筆者の考え方について、自分なりの考えをもって読み取りを深める重要な要因となると考える。

さらに、本教材は、筆者の意見(結論)を最終段落の最後の文でまとめている。まとめ方として、中心となる語句「炭作り」を「人間」に、「森」を「自然」に換えて、事例を基にした考え方を一段階一般化した形で、まとめており、中心となる語句が、一般化されていることに気付かせることで、筆者が、最後の文で意見をまとめていることを、容易に把握させることができる。そして、その筆者の意見をまとめた文の中心となる記述「自然からのめぐみ」「人間のほうから自然にはたらきかける」「自然とともに生きる」は、本論全体を読み通す観点とすることができ、その記述の意味を理解することができれば、筆者の意見を納得することができる表現となっている。こうした文章の構造的な特色と、先に挙げた題名の特色を踏まえて、導入段階の学習活動を工夫することで、初読段階で結論をとらえ、結論の中心となる記述を基にした「読みの課題」をつかませることができると考える。そして、結論を基にした「読みの課題」を設定させることで、児童が主体的に教材にかかわり内容の正確な把握と自分なりの視点を持って自分の考えを明らかにしながら読み深めていく学習活動を組織することができる教材

であると考える。

学習指導の方針

本教材は、四つの意味段落で構成されているが、結論部分の筆者の主張にかかわる内容は、第二意味段落からであり、第一意味段落は、筆者の意見とのつながりが薄い。そこで、本実践では、第一意味段落を除いて扱った。ただし、第一意味段落の役割である、炭に関する児童の関心を引き出したり、知識を得させたりする内容については、導入でふれる。

<つかむ過程>

<つかむ過程>は、<深める過程>を、児童が結論を見通して自分なりの考えを明らかにしながら本論を主体的に読み深めていく過程とするために、題名から結論を見通した「読みの課題」をつかむ学習過程とする。

導入段階で、森や炭作りの様子を収録した写真やビデオを見せたり実物の炭に触れさせたりしながら、森や炭にかかわる児童の生活体験を引き出し、森や炭への興味関心を高めさせる。

炭の材料は木であることから、題名「森を育てる炭作り」にかかわって「木を切る炭作りが、なぜ、森を育てることになるのか」という疑問を児童から引き出しながら、筆者は訴えたい意見があって本教材を書いていることをつかませることで、自分なりの視点をもって教材文を読み始めることができるようにする。

森のイメージをふくらませるに当たっては、学校と地域を挙げて取り組んでいる環境活動を振り返らせ、地球温暖化のメカニズムとともに、森は二酸化炭素を浄化する大切な機能を備えていることや森を守ることの重要性を児童から引き出し、初読の段階から自分たちの生活に照らし合わせて文章を読み進める意識を喚起し、<深める過程><まとめる過程>での自分の考えを表現する場面につなげるようにする。

「読みの課題」をつかませるに当たっては、筆者が伝えたい意見は何か題名にかかわる疑問の答えは何かなどの自分なりの視点をもって全文を読み通す活動を3～4回行い、筆者の意見をまとめている最終段落、その中の中心となる文や語句（記述）をつかませ、「読みの課題」を設定させる。

筆者の意見をまとめている最終段落をつかませるに当たっては、最終段落の前に一行分空いていることに気付かせ、最終段落の中心となる文をつかませるに当たっては、最終段落の三つの文を箇条書きにして提示して比較しやすいようにすることで、最後の文が「森」と「炭作り」から一段階一般化した「自然」と「人間」という言葉を使って意見をまとめていることに気付くようにさせる。

「読みの課題」を設定させるに当たっては、最終段落の最後の文の何が分かれば、筆者の意見が納得できるようになるのかという観点で、中心となる語句（記述）をつかませ、その語句（記述）を疑問の文に換えることで「読みの課題」とさせる。（「読みの課題」：「自然からのめぐみとはどんなものか」「人間のほうから自然にはたらきかけるとはどんなことか」「自然とともに生きるとは、どんなことか」）

<深める過程>

<深める過程>は、最終段落に書かれている筆者の意見の根拠を、児童が主体的に読み取る学習過程とする。

「読みの課題」の答えにつながる記述を付せん紙に書き出すことで、書かれている内容を把握しながら筆者がどのような観点で根拠となる記述を選択しているのかを考えさせる。

取り出した「読みの課題」の答えにつながる記述間のつながりを考えてグループ分けし、そのつながりを明らかにするために、グループのタイトルをつけることで、筆者の本論の進め方や考え方とそれに対する自分の考えを明らかにさせる。

「読みの課題」の答えにつながる事実を取り出す活動と取り出した記述間のつながりを考える活動を児童が主体的に進めることができるように、学習プリントと付せん紙の活用の仕方を工夫して提示し、学習の目的と内容にかかわる説明や指示のほかは、授業者は、極力指示や誘導

を避け、児童に活動を預けるようにする。

多様な気付きと思考が生まれるように、児童間の交流を計画的に設定する。

各時間の主な活動の中で、気付いたことや考えたことなどをその都度書かせることで、筆者の考え方に対する理解や自分の考えを深めることができるようにする。

付せん紙の使い方は、「自力で取り出した記述」「交流を通して取り出した記述」「自分の考え」を書く付せん紙の色を使い分けることで、読み取りの変化や深まりを児童自身と授業者がともに把握できるようにする。

筆者の文章の構想上、重要でありながら、各自の気付きだけでは全員の児童がつかめない可能性がある、焼畑の弊害とその弊害を正すために炭作りを導入した人々の努力とのつながりについては、本過程の後半で、気付いていると予想される児童に説明させるなどしながら、その気付きを全児童で共有できるようにする発問を工夫することで、把握させる。

<まとめる過程>

<まとめる過程>は、学習のまとめとして、読み取った筆者の意見や根拠を基に、自分の考えを自分なりの根拠とともに短い文章に書くことで、筆者が伝えようとしていることへの理解とそれに対する自分の考えを深めさせる学習過程とする。

テーマを「自然と人間のかかわり」に関する自分の考えとし、炭作りから発展して広い視野に立って人間と自然との共存についての理解や考えを深めることができるようにする。

人間から自然への不適切な働きかけとその結果として、森林伐採による大地の砂漠化、酸性雨による森林の立ち枯れ、適切な働きかけとその結果として、植林による森林の復元などの情報を与えながら、日頃児童が取り組んでいるISOの環境活動がCO₂削減につながり森林を保護することにもなるという考え方を引き出す。

この過程での「まとめ」は、<つかむ過程><深める過程>の活動の中で、本文や友達から各児童が取り込んできた様々な情報を自分の思考の中で再構築して表現させることを意図した活動とするために、その都度書いてきた気付いたことや考えたことは、この時間までの自分の思考を振り返るための資料として手元におかせるが、書き残してきた表現をそのままに活用することを求めたり指示したりはしない。

指導目標

森を保全する日本の炭焼き技術の仕組みと、日本の炭焼き技術を活用することで森林の再生と経済的自立を図っている外国の事例を根拠に、「人間は自然とともに生きるべきである」と訴える筆者の考えを読み取り、「人間と自然とのかかわり」についての自分の考えをまとめる。

評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・態度
・目的意識をもって筆者の意図や考え方を読み取り、読み取ったことを基に自分なりの考えをまとめようとしている。	・題名から結論を見通した「読みの課題」をつかみ、その「読みの課題」に沿って筆者の結論を支える根拠を自分なりの考えを明らかにしながら読み深め、筆者が提示している課題に対する自分なりの考えを、自分の生活や経験に照らし合わせながらまとめている。	・文章構成に着目して筆者の主張と根拠をとらえ、筆者が提示している課題に対する自分なり考えをまとめることに生かしている。

指導計画（報告書参照）